

電子版

# 西日本支部通信

## 第27号 (通巻127号)

Nishi-Nihon Branch Newsletter No. 27  
The Musicological Society of Japan

発行：日本音楽学会西日本支部  
〒662-8501  
兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155  
関西学院大学文学部美学研究室気付  
E-Mail: msjwestatkg@gmail.com  
TEL: 0798 54-6212

### 巻頭言

支部長 小石 かつら

このたび、西日本支部長を拝命しました小石かつらです。選挙結果を聞いた時は冗談だと思い、いろんな方々にお声かけいただいても「それは嘘に違いない」と適当に笑ってごまかしていました。前任の松田さんより「引き継ぎの件で」とメールをいただいて、ようやく「ああ、これは本当のことなんだ・・・」と恐ろしく実感し、そのまま非現実のような感覚で今日に至り、これを書いています。きっと、こういう状態を「きつねにつままれたような」と言うんだろうな、と思いつつ。

その一方で、本年度が始動して、すでに半年が過ぎようとしています。この間、本当に多くの方々にお世話になりました。とりわけ前支部長の松田さんをはじめとする委員の方々には、陰に日向に支えていただき、日々、恐縮しているところです。頼りないかぎりですが、皆さまに心から感謝し、お礼申し上げます。

そして、すでに7月までに2回の例会が開催されました。卒業論文・修士論文・博士論文発表といった若手研究者の発表の場となり、多くの会員が集まり、活発な議論が交わされました。本支部通信から、その時の雰囲気が伝われば幸いです。10月以降も、そして来年度も、従来の枠にとらわれず、新しいことにもチャレンジしていけたら素敵だなと思っています。会員の皆さま、どしどしアイデアをお寄せください。

なお、今田さんが編集後記で詳細を記してくださっていますが、これまで運用してきました「日本音楽学会西日本支部メーリングリスト (msj-k)」につきまして、今後どのようにしていくか、皆さまにご意見を伺い決定していきたいと考えています。これまでの経緯・現状をご確認いただき、ご意見いただければと思います。会員の皆さまの引き続きのご協力を、ぜひお願いいたします。

2025年9月8日

□ 目 次 □

支部長 巻頭言 . . . . 1

定例研究報告 西日本支部第 63 回 (通算 414 回) 定例研究会 . . . . 3

< 修士論文発表 >

1. 田村唯花 (関西学院大学)  
「坂道・曲がり角のだんじり囃子」の存在意義と消滅の背景——三田天満神社秋季例大祭を例に  
要旨：田村唯花 報告：田鍬智志
2. 松本愛布 (京都市立芸術大学)  
日本人向け K-POP ツアーから考えるミュージックツーリズム——パフォーマティビティと聖地化  
要旨：松本愛布 報告：福岡まどか
3. 山本量子 (吟道関心流)  
明治期の手風琴曲集に採譜された詩吟旋律が目指したもの——音楽政策との関係から  
要旨：山本量子 報告：貝田かなえ

< 博士論文発表 >

4. 志川真子 (総合研究大学院大学)  
桂六斎念佛の復活に関する民族音楽学的研究  
要旨：志川真子 報告：藤田隆則
5. 木村優希 (お茶の水女子大学)  
バルトークの《ピアノ・ソナタ》第 3 楽章における民俗音楽的特徴の様式化——時間的特性に着目して  
要旨：木村優希 報告：田村唯花

< 一般研究発表 >

6. 陳諾 (京都大学)  
人民中国初期における大衆唱歌による情念喚起とその政治的利用——《得獎歌曲集》の言語情報と音楽テキストを中心に  
要旨：陳諾 報告：上畑史

定例研究報告 西日本支部第 64 回 (通算 415 回) 定例研究会 . . . . 11

< 修士論文発表 >

1. 貝田かなえ (関西学院大学)  
明治期における月琴の流行とマンドリン受容——四竈訥治による邦楽改良の主張  
要旨：貝田かなえ 報告：梶大也

< 一般発表 >

2. 曾村みずき (九州大学)  
薩摩琵琶・錦心流にみる異流派・異種目とのレパートリー共有  
要旨：曾村みずき 報告：薦田治子
3. 小川将也 (九州大学)  
「ヴィッセンシャフトリッヒ」に考える——R. ヴァラシェクと音楽研究の論理  
要旨：小川将也 報告：鈴木聖子
4. 上野正章 (京都市立芸術大学)  
「大人のピアノ」における書物を通じてピアノの演奏を学習するメカニズムについて  
要旨：上野正章 報告：陣内みゆき
5. 篠原盛慶 (無所属)  
田中正平の 13 鍵式純正オルガネット——特設鍵の採用理由の明確化  
要旨：篠原盛慶 報告：筒井はる香

編集後記 . . . . 17

## □定例研究会報告□

### ■西日本支部 第 63 回（通算 414 回）定例研究会

日 時 : 2025 年 6 月 29 日（日）12:00-16:00  
会 場 : 京都市立芸術大学 A 棟 1 階 伝音セミナールーム  
例会担当 : 福岡正太・齋藤桂（京都市立芸術大学）  
司 会 : 福岡正太・齋藤桂（京都市立芸術大学）  
内 容 : 修士論文発表・博士論文発表・研究発表

#### 修士論文発表

「坂道・曲がり角のだんじり囃子」の存在意義と消滅の背景  
——三田天満神社秋季例大祭を例に——

田村唯花

#### 発表者による要旨

田村唯花

本発表では、兵庫県三田市に所在する三田天満神社の秋季例大祭におけるだんじり囃子に着目し、とりわけ坂道や曲がり角でのみ演奏される囃子の存在意義と、その消滅の背景について明らかにした。卒業論文の内容に加え、古地図を用いた地形の分析も取り入れて、近代における地形の変化と「坂道・曲がり角」の囃子の関係性を考察した。

発表の第 1 章では、本祭において演奏されるだんじり囃子について、演奏方法や楽器構成、地区ごとに伝承されている囃子の種類を整理した。加えて、近年では女子や低学年児童の演奏参加が進んだことを受けて、初心者への効率的な伝承を目的とした譜面が作成、活用されている点にも言及した。さらに、譜面の利用の有無によって、音楽的な特徴に違いがみられることも明らかにした。

第 2 章では、坂道や曲がり角といった巡行上の難所でのみ演奏される「坂道・曲がり角」の囃子に注目した。この囃子に見られる長さの定まらない即興的な間である「タメ」などの特徴が、巡行時にだんじりを轆く人々の力を合わせるタイミングを示し、緊張感を与えて集中を促すことで、安全確保に重要な役割を果たしていることを明らかにした。

一方で、この囃子は現在、南嶽地区でのみ盛んに演奏されており、他の 3 地区においては近年演奏されなくなっている。この囃子が消滅に至った背景には、主に三つの要因がある。第一に、道路の舗装や拡張により巡行時の危険性が低下し、注意喚起の必要性が薄れたこと。第二に、男性の勤務形態の変化により、子どもたちへの指導時間が減少したこと。第三に、少子化や女性の社会進出に伴い演奏者層が変化し、初心者の割合が増加した結果、この囃子の未修得者が増えたことである。さらに、演奏頻度の低いこの囃子は譜面化されず、伝承の機会が減少したとも考えられる。それに対して、南嶽地区では、道幅の狭い曲がり角が巡行ルートに残存しており、注意喚起を必要とする場面が現在も存在することから、この囃子が演奏され続けていると推察した。

第 3 章では、古地図を用いて江戸時代後期から現代までの地形の変化を検証し、だんじりの巡行ルートである坂道が、かつては急勾配かつ階段状であったものの、後の盛り土によって現在の緩やかな傾斜へと変化していることを確認した。このような地形の変化も、「坂道・曲がり角」の囃子の演奏機会を減少させる一因となったと結論づけた。

以上のように本発表では、かつては安全確保という重要な役割を担っていた「坂道・曲がり角」の囃子が、社会環境や地形の変化によってその必要性が失われ、結果的に消滅していった過程を明らかにした。

#### レポーターによる報告

田鍬智志

田村さんの発表は、兵庫県三田市の三田天満神社秋季例大祭にでる、だんじりの囃子について、その音楽の変遷における交通インフラ整備や楽譜導入など近代化の影響を論じたものである。

発表ではまず、序章として、三田天満神社のだんじりの特徴、だんじりを出す 5 地区の位置関係、そして、氏の論の中でキーワードとなる、だんじり巡行路の「坂道」「曲がり角」の存在と位置が示された。

第 1 章では、5 地区（本町/南嶽/北濱/西山/天神）それぞれのだんじり囃子にもちいられる太鼓・鉦（2 地区のみ用いられる摺鉦）の形状と奏法、各地区の囃子各曲（基本形/基本形の速い版/帰り/走り/宮入/坂・曲がり角/仕舞太鼓）の伝承の有無が示された。次に、囃子の伝承方法として、耳コピーや口唱歌にくわえ、

近年の特徴として譜面を作成しそれを伝承に活用する方法が近年の特徴であることをあげ、譜面の有無で、リズムやテンポ、技巧に違いが生じていることを指摘し、さらにもう一つの近年の特徴として、低学年および女子が囃子の演奏に加わったことを指摘する。

第 2 章は、いよいよ氏が注目する《坂道・曲がり角》曲について語られる。《坂道・曲がり角》のリズムの特徴、登坂・下り坂でのテンポの違いなどが説明されたうえで、南嶽地区を除いてこの囃子曲がほとんど演奏されなくなった要因として、

- ①「道路の舗装・拡張」により、演奏機会が低下した。
- ② 成人男性の「勤務形態の変化」により後進指導の時間が減少し、譜面を導入した。
- ③「少子化と女性地位向上」により、低学年や女子が囃子演奏に参入し、未習得者が増加した、ことをあげ、それら 3 要因が相互に作用して、「《坂道・曲がり角》曲の消滅」化に拍車をかけていることを明らかにされた。

第 3 章では、江戸後期、明治初年、明治終り、現代の三田の地図を比較して、旧三田城（陣屋）の表門に至る道のカーブや勾配が、車道向けに整備されていく変遷を明らかにし、このような近代以降の交通インフラが、《坂道・曲がり角》曲を不要にしたのではないかとの見解を示して結びとされた。

以上の発表のあと、フロアからは、楽譜を使うことの意義について質問があった。それに対し、田村氏は、知識経験ゼロの人が使うものではなく、口伝で覚えた囃子の記憶の補助として使用している、との回答があった。また、「《坂道・曲がり角》曲の消滅」に対して当事者たちはどのように思っているのか、という質問に対し、田村氏は、仕方がない事と割り切っている印象がある、との見方を示した。

報告者の印象としては、江戸後期から巡行ルートは現在と同じであったのか？、陣屋の敷地内の階段状の道をはたしてだんじりが通ったのか？また、（黒丸などを書き加えているとはいえ）実質唱歌を文字化したに過ぎない「楽譜」の導入が、音楽そのものの簡素化や消滅を招くものだろうか？、など、幾分疑問に思う点はあった。しかし、交通インフラ整備、楽譜導入、少子化など近代以降の社会・文化の諸要素と在地伝承音楽の様式変化との関係を解明する端緒的な事例研究として、今後の進展が大いに期待される研究といえよう。

修士論文発表

日本人向け K-POP ツアーから考えるミュージックツーリズム  
——パフォーマティビティと聖地化——

松本愛布

発表者による要旨

松本愛布

本研究ではミュージックツーリズムと K-POP をテーマとして、音楽によって特定の場所が「聖地」として意味づけられていく「聖地化」の過程を明らかにすることを目的とした。K-POP は、韓国の音楽産業にとどまらず、観光、ファッション、グルメなど多様な領域を巻き込みながら展開されている。聖地巡礼型のミュージックツーリズムに関しても、その文化的な広がり的一端を担っている。しかし、これまでのミュージックツーリズム研究において K-POP を扱った事例は少なく、K-POP 研究においてミュージックツーリズムを扱った事例についても十分に検討されてこなかった。

そこで本研究では、2024 年 8 月に実施された「東経 127 度線が由来のアイドル 聖地巡りツアーMV 撮影地や SM エンターテインメント KWANGYA@seoul も 景福宮+ソウルの森など<半日/日本語/明洞発>」及び「韓流聖地巡りツアー！龍仁大長今パーク（旧 MBC ドラミア）+国立博物館ほか※季節限定プランあり<終日/日本ガイド/昼食付/ホテルお迎え>」という 2 つの K-POP ツアーに参加し、ガイドや参加者の語り・振る舞い、場の構造に注目してフィールドワークを行った。また、ツアー会社への書面インタビューを実施し、どのような観点から「聖地」設定されているのかを明らかにした。理論的枠組みとしてはジュディス・バトラーの「パフォーマティビティ」と、ヴィクター・ターナーによる「通過儀礼」の概念を導入し、繰り返される語りや行為がどのように場所の意味を再構築し、特別性や真正性を生み出すのかについて分析を行った。

分析の結果、聖地化はガイドによる語り（「ここです」「同じでしょ」という表現）と、語り（「聖地が写っている写真の提示」）、参加者の模倣的な行為（同じアングル・ポーズでの撮影、同じ衣装やメニューの再現）などによって支えられており、それらの繰り返しが場所の「真正性＝本物らしさ」を強化していた。また、聖地の空間には、非日常空間への「分離」、同じファン同士の一体感や共同体間を得る「移行」、そして日常への「再統合」といった通過儀礼の構造と重なっており、段階的に聖地化が行われていることがわかった。特に、壁一面に貼られた付箋や、ファンによって作られたメッセージの共有空間は、ファン同士が繋がりを

感じる重要な装置として機能している。

このように聖地化の過程にはガイドや参加者自身の語りと行為が深く関わっており、聖地の意味や真正性は彼らのパフォーマンスな実践によって繰り返し再構築されていたことが明らかとなった。

今後はこうした知見を基に、特定の場所の意味が変容する過程について検討したい。特に富山県南砺市で毎年開催される“SUKIYAKI MEETS THE WORLD”に注目し、特定の地域が音楽イベントを通じていかに新たな意味を獲得していくのかを検討していきたいと考えている。

レポーターによる報告

福岡まどか

まず卒業論文の目的として、日本人を対象とした K-POP の聖地巡礼ツアーを事例として検討し音楽によって特定の場所がある特別の意味を持つようになり「聖地化」していく過程を明かにすること、が提示された。音楽と観光が結びついた観光事業ミュージックツーリズムをコンテンツツーリズムの一つとして位置づけた上で、実際に発表者が参加した K-POP 聖地巡礼ツアーの参与観察の結果を提示し、「パフォーマンスビティ」や「通過儀礼」などの理論的概念を用いて分析する、という内容であった。

ツアーにおけるガイドの語りや行為は聖地の境界を明確化し真正性を強化していくものとして位置づけられた。一方で観光客は、写真撮影やアーティストの模倣行為などを繰り返し行うことによって観光客としての役割を強化していくことが示された。そしてこのようなツアーの経験によってある場所が「聖地化」されていくプロセスが通過儀礼のプロセスに擬えられて分析された。ターナーの儀礼研究の成果を対応させる方法にはやや注意が必要だと感じられたものの、さまざまな文献を検討して、その概念を用いて分析を試みたという点ではとても意欲的な卒業論文であり頼もしく感じられた。

質疑応答では、日本人向けツアーとそれ以外のツアーとの違いについて、個人旅行の可能性などについての質問があり、参加者の使用言語によって通訳が異なるという事情、ツアーの利点やツアーならではのシステムなどが提示され、この事例における旅行会社やガイドの役割の重要性が感じられた。国の助成との関わり、アーティストの事務所との関わりなどについての質問もあり、今回の事例においては直接の関わりは見られずコピーライトなどにも配慮がなされて行われている現状が示された。またミュージックツーリズムにおけるホスト社会の側の人々とのやり取りなどにも注目した方が良いのではないかというコメントも見られ今後の課題として位置づけられた。ミュージックツーリズムで聖地が形成される以前の状況、特にツアーが組まれる端緒となった事柄についての質問もあり、それに関してはファン同士の SNS 上での交流の影響などが大きく、そのようにして形成された「聖地」が実際のツアーを通して補強されていく現状が示された。上記の質疑応答も踏まえて、ファンがどのようにして「聖地」を作っていく、実際にツーリズムの中で「聖地」を訪れる経験をどのように捉えているのか、という点についてもさらなる研究の発展を期待したい。

**修士論文発表**

明治期の手風琴曲集に採譜された詩吟旋律が目指したもの  
——音楽政策との関係から——

山本量子

発表者による要旨

山本量子

本研究は、明治期の詩吟（以下「明治詩吟」）の旋律と芸態を、同時期に流通した洋楽器譜及びその広告史料に基づいて再現し、そこに紐付く明治期特有の文化的背景を考察することによって、漢詩朗詠史における明治詩吟の特異性を明らかにするものである。

詩吟は日本の朗詠法でありながら、学術的には十分に研究されていない。特に明治詩吟の旋律については音源資料が乏しく、書記伝承を可能とする譜本も見当たらないため、実態解明が進んでいない。また、旋律の変遷に影響を及ぼす社会的要因の研究も不足している。さらに日本で初めて詩吟旋律を洋楽譜化した尾崎彌太郎の『西洋楽譜日本詩吟集』（明治 27 年）の歴史的意義についても十分に論及されてこなかった。本研究はこれらの問題意識を出発点とし、詩吟旋律の解明とその社会的背景に関する考察を目指すものである。

本研究では日本の音楽教育の土台となった音楽取調掛「音楽取調成績申報書」の記述、和洋音楽折衷論を理想として始まった音楽教育、そしてそれを踏まえて出版された洋楽譜群（主に手風琴曲集）に焦点を絞って、その旋律や広告史料を調査した。これにより、西洋音楽受容期の音楽政策が詩吟旋律に及ぼした影響（西洋楽器に合わせて吟じる・長音階・三拍子）を明らかにした。

またこれまで評価が定まらなかった『西洋楽譜日本詩吟集』については、見落とされてきた著者の思想や

執筆意図を踏まえて再検証することで、この楽譜集の詩吟の旋律的特徴が明治政府の音楽政策（国楽の創成、俗曲改良、五線譜の推奨など）と密接に結びついていたことを明らかにした。加えて、序文執筆者である元良勇次郎の言説と両者の関係に着目することで、元良を中心とする日本語の音韻論的議論と詩吟旋律との強い関連を示し、詩吟史・日本音楽史・日本語音韻史の発展に資する知見を提供した。

現代に至るまでの詩吟旋律の変化は標準アクセント受容の歴史と密接な関係がある。明治期は国家統一のために標準語の選定が模索された時代であるが、当時の詩吟には言葉のアクセントに対する意識が定着していなかったことが洋楽譜上の旋律から確認できた。これらの知見は、標準語の普及以前における朗詠の実態を示す資料として言語史研究に貢献するとともに、芸能の変容を考察する上での楽譜史料の活用方法についても新たな視座を提供するものである。

「脱平均」が国家戦略として掲げられる現代では、標準アクセントの受容を巡る意識も多様化し、賛否が交錯する新たな段階に移行している。本研究は音楽学と音韻学を柱とする学際的研究の基礎となることが期待される。

### レポーターによる報告

貝田かなえ

本発表は、明治期の詩吟旋律の特徴について、当該時代に出版された『西洋楽譜日本詩吟集』を中心的な資料として調査し、社会的背景からの影響を明らかにしたものであった。発表者は、本研究の重要性について、人々の言語に対する認識がいかにして形成されてきたのかをも明らかにできるという言語学的な広がり主張した。

発表の前半では、詩吟の定義や歴史の変遷、研究方法と手風琴に関する基本情報を整理する形で進められた。その中で、明治期を中心に挙げた理由として、詩吟の様式化が起こった重要な転換期であることが述べられた。さらに、手風琴曲集を資料としたのは、詩吟旋律が複数人によって多く採譜され、全国規模で流通したことによる、高い普遍性を認められることにあるという。次に、調査した資料と先行研究が提示された。調査によって明治期と現代の詩吟における特徴の差を明らかにされ、明治期の詩吟は国家による音楽政策から強い影響を受けていたことが指摘された。現代の詩吟との差を確認するために、『楓橋夜泊』を例として発表者が「VOCALOID」を用いて再現した音源が流された。

発表の後半では、『西洋楽譜日本詩吟集』に着目し、執筆者の尾崎彌太郎と本書の序文を執筆した元良勇次郎の経歴がまとめられた。本書は詩吟の洋楽譜化の意図を明記した唯一の文献であると同時に、これ以降の手風琴曲集の基礎となる重要な位置付けであるという。発表者は、尾崎について本書の「発端」における記述から音楽取調掛の目指した「国楽創成」や事業に影響を受けていたことを示し、教育者の立場から本書が出版されたことを主張した。また米国への留学経験があった元良について『哲学会雑誌』における記述から、元来日本語に対して言語学的な問題意識を持っていたのではないかと考察された。発表者は、本研究によって明治期の音楽政策と詩吟の旋律が密接に結びついていたことを明らかにできたが、今後更なる解明と現代への継承過程についても考慮すべきだとして発表を締め括った。

質疑では、当該時代における手風琴楽譜の広がり『西洋楽譜日本詩吟集』の書評の有無について指摘された。発表者によると、伝聞的な記録は残っているものの、詳細は不明であり、詩吟と合わせて手風琴を演奏することは当時の日本人にとって複雑であったことが想像され、広く普及したとは考えにくいという。音楽教育に実践された記録に関する質疑も寄せられたが、正式に取り入れられたのは昭和以降のことであり、書評と合わせて今回の調査では未発見だと報告された。今後の進展に期待したい。

### 博士論文発表

桂六斎念佛の復活に関する民族音楽学的研究

志川真子

### 発表者による要旨

志川真子

2005年夏以降中断していた桂六斎念佛（以下、桂六斎）は、2019年、14年ぶりに再開された。発表者は修士課程の時から自らも桂六斎念佛保存会の会員となり、笛の演者として桂六斎の実践に参加し、復活過程の参与観察を続けてきた。発表者の博士論文「桂六斎念佛の復活に関する民族音楽学的研究」は、5年間の参与観察をもとに桂六斎の復活と伝承の実態を民族音楽学的な視点から検討したものである。本論文では、参与観察の中で実践的に引き出した4つの要素、すなわち「伝承」「担い手」「地域社会」「資金」を主要な議論の視点として設定し、桂六斎の復活と伝承について記述・分析を行った。本発表では、博士論文の内容に基

づき、4つの視点それぞれから明らかになったこと、民族音楽学的手法の成果、桂六齋の復活のために必要であった条件などについて発表した。

「伝承」「担い手」「地域社会」「資金」という4つの視点から桂六齋を観察してきた結果、それぞれの視点には相互関係が認められ、どの視点も桂六齋の復活の過程を記述・分析するために必要不可欠であったと結論付けた。また4つの視点からは、桂六齋の復活のために必要であった4つの条件を導き出すこともできた。すなわち、復活の際に、経験者の記憶や音源資料などの参照できるものが伝承されていたこと、担い手が集まったこと、徐々に地域社会に受け入れ始めていること、資金があったことの4つである。これらの条件が復活のための十分条件であるわけではないが、桂六齋の事例では少なくとも復活のための必要条件であったと考えられる。また、発表者のような新しい担い手にとっての習得の困難さや習得方法の実態を、発表者の実体験から一例として示すことができたこと、また、音楽に関する行動や行為に着目するというアプローチをもとに4つの視点を設定したことで、上記のような考察が導き出せたことは、民族音楽学的手法の成果であったと言える。今後は、芸能の復活をより幅広く論じるために、桂六齋のような復活過程にある芸能や、復活させたいと考えられている芸能など、さらなる事例を検証する必要があると考えている。

### レポーターによる報告

藤田隆則

桂六齋念佛は、昭和期以降、数度にわたる中断を繰り返してきた。戦後すみやかに復活はした(第2期)ものの、昭和34年(1959)に中断。昭和57年(1982)に再開(第3期)するが平成17年(2005)に中断。そして14年後の令和元年(2019)年に、現保存会会長の強いリーダーシップのもとで再開されて現在にいたる。発表者はこの芸能が、中断と復活を繰り返してきたという点に目をむけ、演奏の担い手として保存会に参加しつつ「中断を経験した芸能の復活と伝承の実態」の観察・記述をおこなった。そのために発表者がとりあげた視点は「伝承(音楽テキスト・演目・演出)」「担い手(会員の多様性・個人のリーダーシップ)」「地域社会(住民からの視点・他地域との比較)」「資金(収入と支出・音への影響)」の4つである。

第1の「伝承」について。現在の復活の中心人物である保存会会長は、第3期(自身が子供であった時代)に、芸能を習得・実践していた。会長は今回の復活にあたって「できるだけ形を変えずに伝えたい」という方針をかかげたが、そのために自らが記憶・体現する第3期の実践を、第2期の古い音源を参照して修正する作業をおこなった。その観察と分析を通して発表者は「昔の音源は参照するべきものとして強い影響力を持ちながらも、それに全て合致させることはできていない」ということ、また「楽器ごとに過去の音源の参照の度合いには差がある」ことを具体的に指摘した。面白く感じられた。

六齋念佛は本来、仏教行事である。しかし桂六齋念佛には、そこに直結するレポーターがそもそも失われていた。そこで会長は、第2期にあった断片的な録音が宗教的なレポーターであることを確信し、それをもとにして「結願」というレポーターを復活させた。発表者はそれが「音源の演目からは大きく変化」したものであると指摘するが、「仏教の教えに基づく六齋念佛の精神や信仰の重視」という保存会(会長)のかかげる方針には一致し、正当化されることが、発表者の資料の記述からもうかがうことができる。

第2の「担い手」については、発表者が、現在の保存会の構成員を「経験者」「未経験者」「子供」に分けて、その担い手間の温度差を明らかにしている点が面白かった。そこに、地域社会(第3の視点)における担い手の歴史的な変遷を考慮にいれると、なお面白くなるのではないか。そもそも六齋念佛は、第1期においては、青年会(若衆)の義務的参加によって、第2期には青年会の部分参加によって、そして第3期からは、保存会によって担われているが、現在の保存会は基本的には任意参加の団体である。そのことと、現代の地域社会におけるトラブル(騒音問題、棚経の拒絶)といったこととは深く結びついているだろう。地域社会における伝統芸能に対する眼差しの現在の状態のみならず、その変遷についても研究が深まれば、もっと面白くなるだろう。

最後に発表者は、保存会の「資金」(第4の視点)についても、その大枠を提示しているが、「資金面への影響は、芸態や音にも変化を与える」と述べているのが、とても気になった。重要な指摘であるが、その具体的な変化の事例の提示が、おそらく時間不足のために、おこなわれなかったことが残念である。社会経済的な要因が音やパフォーマンスにどのように細かく影響しているか。民族音楽学的研究として、深く追求してもらいたい。

フロアからは、発表の最初に紹介があった民族音楽学の研究史そして方法論と、本編との「視点」との方法論上の関係性あるいは連続性がよく理解できないという指摘があった。また復古や創作に対して外部(他の六齋念佛など)からの評価がどのようなものだったか、という質問も出た。どちらも、発表を面白く聞き、今後の展開を積極的に期待する質問であった。

博士論文発表

バルトークの《ピアノ・ソナタ》第 3 楽章における民俗音楽的特徴の様式化  
——時間的特性に着目して——

木村優希

発表者による要旨

木村優希

本発表の目的は、バルトーク・ベーラ Bartók Béla (1881-1945) の《ピアノ・ソナタ》BB88 第 3 楽章を対象とし、彼が民俗音楽に由来する特徴をどのように様式化したのかを解明することにある。

民俗音楽の様式化に着目する根拠は、バルトーク自身の言説にある。彼は芸術音楽に民俗音楽を取り込む際、「どのような出自の主題を使うかではなく、それをいかにして使うか」が重要だと主張している (バルトーク 2018)。また、対象楽曲とする《ピアノ・ソナタ》第 3 楽章は、バルトークの創作における民俗音楽の影響がより深化した、重要な転換点とされる 1926 年に作曲されており (伊東 1997, etc.)、実際彼は 1941 年にこの楽曲における民俗音楽の影響について言及している (Bartók 1976)。一方で対象楽曲では、西洋芸術音楽に伝統的な、主題や音楽素材の多様な展開も観察される。これらのことから、単に民俗音楽の旋律を引用したり模倣したりした作品ではなく、敢えてソナタという西洋芸術音楽の伝統的な曲種を採用した本楽曲でこそ、民俗音楽の「取り込み方」に対する挑戦的な試みを検証することができると思われる。

そこで本発表では、まず民俗音楽的特徴の様式化を検討するための前提として、対象楽曲の構造と民俗音楽的特徴との関係、すなわち「どこに」「何が」取り込まれているかを明らかにする。先行研究が本楽曲を「単一主題的ロンド形式」(Somfai 1981) として論じたのに対し、本発表の分析では予め形式を規定せず、むしろ対象楽曲の核となる 4 つの主題・素材が、変奏・変形・再現・要素の組み合わせという多様な仕方で開催されていることに焦点を当てる。続いて、先行研究が明らかにした 4 つの民俗音楽的特徴から「断片化」と「交替するリズム」を取り上げ (Somfai 1981)、対象楽曲においてどのように様式化されているかを解明する。具体的には、バルトークの言説と民俗音楽コレクションをもとに、これらの特徴が民俗音楽の文脈ではどのように実践されているかを検討し、対象楽曲と比較する。これにより、対象楽曲では断片化の音の数を減らしたり、強勢が交替する音価の単位を細分化したりすることで、いずれの特徴も民俗音楽より過剰な形へと様式化されていることを指摘する。さらに、これらの特徴を過剰な形へ様式化することのみならず、楽曲終盤に偏在させて「切迫感」を生み出すことで、バルトークはハンガリーの民俗音楽に散見される時間的特性を対象楽曲に取り込もうとしたことを明らかにする。

レポーターによる報告

田村唯花

本発表は博士論文に基づき、ハンガリーとその周辺地域の民俗音楽を収集・研究したバルトーク・ベーラによる《ピアノ・ソナタ》第 3 楽章に民俗音楽的特徴がどのように様式化されているかを明らかにすることを目的とする。発表者は、バルトークが民俗音楽を「いかにして使うか」を重視していたことを踏まえ (バルトーク 2018)、先行研究 (Somfai 1981) で指摘されてきた本楽曲における民俗音楽的特徴と、民俗音楽におけるそれらの特徴との差異を、彼の言説と民俗音楽コレクションに基づき抽出・分析した。

発表では、ハンガリーの民俗音楽曲には、「断片化」と「交替するリズム」を終盤に偏在させることによって、「切迫感」を生み出すという時間的特性が散見され、対象楽曲においても同様の特性が取り込まれていることが示された。本発表で用いられる「断片化」とは、旋律の一部が断片として切り出される現象、「交替するリズム」とは、同じ音形が、強勢が入れ替わった状態で反復される現象を指す。発表者は、対象楽曲における「断片化」が民俗音楽曲に比して少ない音数で行われていること、また「交替するリズム」においても同様に、より細分化された単位での音形で行われていることを明らかにし、対象楽曲におけるこれらの現象が「過剰な形」へ様式化されていると結論づけた。また、当日は割愛されたが、博士論文の第 3 章においても、民俗楽器の「フルヤ」に特徴的な装飾を「過剰な形」へ様式化することで、フルヤ特有の音響を取り込もうとしていることを明らかにしたと述べた。

質疑応答では、対象楽曲における様式化を「過剰な形」とする根拠について問われ、発表者は、バルトークが、民俗音楽で実践されている「ライブ感」のような、記譜で表現できないものをピアノ・ソナタにおいて実現するために、民俗音楽に由来する現象を大袈裟に変化させたのではないかと考察し、そのことを「過剰な形」と表現したと回答した。また、断片化やそれによる切迫感は、ロマン派的なピアノ・ソナタの常套手段ではないかという指摘に対しては、バルトークが対象楽曲を作曲するにあたり、民俗音楽的特徴を取り入れていながら、その接続を一切明示していない点に、対象楽曲の独自性があると説明した。さらに、博士

論文の第 3 章での民俗楽器の「音響」と、バルトーク自身が記譜できない事柄として挙げた「音色」は同義であるのかという質問があった。これに対して、博士論文の第 3 章では、対象楽曲の第 2 エピソードにおける八分音符の過剰な装飾により、フルヤ特有の不安定な「音響」を再現しているのではないかと考察しており、バルトークの挙げた「音色」とは微妙に意味が異なると説明した。

本研究は、対象楽曲を精緻に分析し、独自の視座から考察を加えたものであり、今後は研究対象のさらなる拡充を通じた研究の展開が期待される。

#### 研究発表

人民中国初期における大衆唱歌による情念喚起とその政治的利用  
——《得獎歌曲集》の言語情報と音楽テキストを中心に——

陳諾

#### 発表者による要旨

陳諾

本研究は、人民中国における初の公式唱歌集である『得獎歌曲集』（1954）を分析対象とし、この歌集が愛国心および集団的アイデンティティの形成に果たした役割を、発想標語と歌詞を中心に、情念喚起のメカニズムをテキスト情報に基づいて検討するものである。

唱歌は、1930 年代から中国共産党の左翼文化運動において、特に教育水準の低い民衆への情報伝達手段として注目され、他の文化活動に比べて優れた浸透力を持つものとして高く評価されてきた。1949 年の建国直後、中国共産党は中華民国期から引き継がれた社会組織を社会主義イデオロギーに基づき再編成するという喫緊の課題に直面しました。このような政治的背景の中、大衆唱歌は人民中国初期の政策伝達、社会動員、政権維持といった要請に応える重要なプロパガンダ手段として位置づけられた。

1954 年、人民中国の中央人民政府文化部と中国文学芸術界聯合会は、過去三年間（1949～1952）の全国大衆歌曲選考における受賞作品を顕彰するため、同年 6 月に『得獎歌曲集』を編集・出版した。この歌集は、人民中国の文化事業を担う最高機関による初の音楽出版物とされており、その役割を論じる手がかりとして、序文において「思想」「感情」「情緒」「精神状態」といった感情関連語が多く用いられている点が重要な示唆を与えている。

従来の中国社会主義唱歌に関する研究は、主に質的な歌詞読解に偏り、主観的な主題抽出と解釈にとどまっておられ、感情そのものの構造的な意味生成プロセスには十分な検討がなされていなかった。本研究では、Python を用いた自然言語処理と機械学習技術を活用し、『得獎歌曲集』における発想標語に対する感情カテゴリー分析（プロトタイプ・アプローチ）および歌詞群に対する計量テキスト分析（感情的傾向識別・感情的語彙識別・トピックモデル構築）を組み合わせることにより、テキストを通じて国家的感情秩序がどのように構築されるかのメカニズムを明らかにした。この量的アプローチにより、従来の質的研究では捉えきれなかった感情的傾向や主題構造を定量的・統計的に把握し、可視化することが可能となった。さらに、この方法を通じて、人民中国におけるプロレタリア音楽実践がどのようにして大衆の内面に浸透し、感情と政治の統一性を促進したのかについて、新たな視点からの考察を得ることができた。

#### レポーターによる報告

上畑史

本発表は、社会主義を標榜し 1949 年に樹立された中華人民共和国において、初期共産党政権によるプロパガンダの主要なツールとなった大衆唱歌に着目し、歌詞が表出する感情に加え、それらの感情と結びついた語彙や主題やその構造を、量的アプローチによって明らかにすることを旨とするものであった。この調査研究の糸口として発表者は、党公認の佳作 114 曲を集録した『得獎歌曲集』（1954 年刊行）に焦点を当て、全曲の歌詞を分析し、その特色と傾向を数値化し可視化した。

客観性を担保するため発表者が採用した量的アプローチは従来、言語学や情報処理の分野で使用されてきた。また、初期中国共産党による文化事業の重要な成果である同曲集を、音楽学や文化研究の領域で学術的な分析対象とする先行研究はほぼ前例がなかった。そうした現状において、発表者の着眼点と研究手法は独創的かつ先駆的である。

発表者はまず、『得獎歌曲集』全曲各々に記された発想標語に注目し、その感情的な性格を 5 つに類型化するプロトタイプ・アプローチを援用することによって、同曲集では“Joy”に属する発想標語が際立っていることを明らかにした。次に、発表者は計量テキスト分析の方法を用い、歌詞から抽出した全ての語彙を加工データ化し、ルールベースとなる 7 種の感情に全曲を分類した。その結果、「良い (好)」「楽しみ (乐)」

という感情的な傾向が顕著であることが判明した。以上の類似する結果によって、『得獎歌曲集』の楽曲は総じて「ポジティブ」な性格を有していることが明示された。

さらに発表者は、この性格がどのような①語彙②主題③構造によって形成されているのかを報告した。①に関しては、ワーククラウドによってキーワードが可視化され、「人民／祖国／毛主席」など「現実的」な対象・概念に係る語彙の優位性が判明した。②に関しては、潜在的ディリクレ配分法によって見出された5つの主題が楽曲内に混在していることが明らかにされるとともに、その図式化によって③が示された。以上により本発表では、大衆唱歌を通じて国家によって形成された国民的感情や文化の構築のメカニズムが客観的なデータに基づき明らかにされ、音楽研究や文化研究における量的アプローチの有効性も示された。発表後は、曲集における発想標語導入の背景や、同時期の他の芸術文化との連動について質疑応答があった。

## □定例研究会報告□

### ■西日本支部 第 64 回（通算 415 回）定例研究会

日 時 : 2025 年 7 月 26 日（土）14:00-16:00  
会 場 : 九州大学大橋キャンパス 2 階 322 教室・オンライン  
例会担当 : 西田紘子（九州大学）  
司 会 : 小寺未知留（立命館大学）  
内 容 : 修士論文発表・研究発表

#### 修士論文発表

明治期における月琴の流行とマンドリン受容  
——四竈訥治による邦楽改良の主張——

貝田かなえ

#### 発表者による要旨

貝田かなえ

本発表は、明治期に日本へ流入し急速に普及したマンドリンの受容を、明清楽の流行との比較を通じて考察することで、西洋音楽受容を再検討するものである。

マンドリンは大正期には流行期を迎え、マンドリン・オーケストラを編成する合奏形式として、今日に至るまで主に学校の課外活動や趣味の場で演奏されている。こうした状況から、マンドリンは同じく明治期に流入したピアノやヴァイオリンなどの他の西洋楽器とは異なる受容がなされたといえる。

発表者は修士論文において、明治期以降に刊行された撥弦楽器に関する新聞広告を調査し、最も多く掲載された楽器が「月琴、箏、マンドリン、ギター」へと移り変わっていることを示した。また、興味深いのは、大正 3（1914）年 7 月 27 日に発行された『読売新聞』において「マンドリンが月琴に似ている」と紹介されていたことである。そこで発表者は、マンドリン流入以前に普及していた月琴の受容が、マンドリン受容の基盤となった可能性を指摘した。月琴にはフレットが備わっており、比較的容易に音程をとることが可能だったために明清楽の流行を支えたとされる。また、月琴を含んだ器楽合奏は素人奏者によるもので、彼らがその流行を形成していたようである（塚原 1993）。以上のような演奏習慣の特徴や、楽器の演奏姿勢は、マンドリンと共通する点といえる。そして、明清楽の流行が日清戦争を契機として衰退した頃、移り変わるようにマンドリンは流行した。

マンドリンを日本で初めて演奏した人物は四竈訥治（1854-1928）である。彼は日本初の音楽専門雑誌『音楽雑誌』を創刊した人物として知られ、第 27 号の誌面では「邦楽を改良するために西洋音楽の理論を取り入れるべきだ」という意見を表した。明治 27（1894）年のマンドリンの初演に邦楽曲《八千代獅子》の編曲が演奏されたことから、四竈が邦楽を重要視していた様子が見て取れる。

その後もマンドリンによる邦楽の演奏は続き、大正 4（1915）年に発売されたマンドリン演奏を収録したレコードにも邦楽曲が確認できる。四竈の記述と演奏から浮き彫りになった「マンドリンと邦楽演奏」の系譜は受け継がれ、昭和期に活躍した古賀政男（1904-1978）によって新たな展開を見せる。ピアノやヴァイオリンなどの他の楽器でも一時的な邦楽の演奏は行われたが、マンドリンにおいては「邦楽改良」という背景を出発点とし、長期的に演奏されている点には留意すべきである。

今後は調査の時代区分を拡大し、研究を進めることで、マンドリン受容という観点から従来の西洋音楽受容研究に新たな視座を提示していきたい。

#### レポーターによる報告

梶大也

評者は以前からこの楽器について疑問を持っていた。第一に、ハードオフのジャンク品コーナーに並ぶ楽器群。第二に、古くからオーケストラのサークルがある大学に同様に存在するサークル。これらは流通と演奏団体が歴史上、強固に存在してきたことの証左とも言える。

本発表は修士論文「明治・大正期におけるマンドリンの普及——比留間賢人と四竈訥治の意向と影響」をもとにした内容である。なお、一部は既に論文化されている（貝田かなえ「学生と令嬢に演奏されたマンドリン——西洋音楽受容における特異性」『美学論究』40、2024 年）。

発表内容は演奏経験を踏まえつつ、それを他の楽器と組み合わせ、研究として相対化したものであったと思う。特筆すべき点は 2 つある。第一に、新聞、本発表では特に明治期から敗戦までの『読売新聞』にお

る箏、月琴、マンドリン、ギターの広告掲載数の比較である。マンドリンに関わる広告だけでなく、他の楽器も調査することで、明治中期の月琴、明治末期から大正の箏、大正から昭和初期のマンドリン、それ以降のギターという流行の推移が明示された。第二に、明清楽との連続性である。発表者は史料中の類似性に係る言説に留まらず、楽器の形態、和服で正座して演奏するという行為との親和性の高さを同時代の絵画や通信教育教材の挿絵から検討した。ヴァイオリンの場合は不自然かつ演奏に差し障りがあるのに対し、月琴、三味線、マンドリンはほぼ共通した構えであり、同じ服装、姿勢でもさして影響がないのだと得心した。質疑応答では、(1) 新聞調査の方法、(2) 月琴からマンドリンへの流れという仮説の妥当性、(3) 月琴がしばしば演奏された茶屋、花街におけるマンドリンの受容状況について議論がなされた。

発表中の言及はなかったが、邦楽改良は渡辺裕『日本文化——モダン・ラブソディ』（春秋社、2002年、特に第1章）、マンドリンは細川周平『近代日本の洋楽百年——黒船から終戦まで』（岩波書店、2020年）で論じられた、研究史上ホットな話題である。特に後者ではバンジョーを通じたジャズとの連続性などが論じられている。この双方を同時に射程に収めるところに本発表の今後の領域的な可能性がある。具体的には、評者は本発表を、音楽の和洋中、クラシックと流行歌（服部正と古賀政男という構図でも説明できる）、楽器や楽譜の流通、プロフェッショナルとアマチュア、大学のマンドリンクラブ在籍者の進路とOB組織、演奏会の様式とレパートリー、以上の諸要素と共にあった社会的背景を包含する全体像を再構成する端緒として聴いた。これはマンドリンを通じた洋楽受容史叙述の全面的な見直しに通じる。そしてそれが形になった時、冒頭の疑問は疑問でなくなるのだろう。

### 研究発表

薩摩琵琶・錦心流にみる異流派・異種目とのレパートリー共有

曾村みずき

### 発表者による要旨

曾村みずき

明治後期から昭和初期にかけて全国的に流行した薩摩琵琶の一流派である錦心流は、明治末期に永田錦心（1885-1927）によって創始された。錦心流のレパートリーは、その成立時期によって古曲（江戸期）・明治新曲（明治期）・錦心流新曲（錦心流創始以後）に分類でき、既存の琵琶歌であった古曲・明治新曲はレパートリー全体のおよそ半数を占める。本発表は、先行流派から継承された琵琶歌の詞章内容の比較を通し、錦心流のレパートリー構築における先行流派との差異化の実態を明らかにすることを目的とする。また、永田錦心は宝生流の謡曲を学んだ点や、錦心流の琵琶歌本内に「シテ」「ワキ」等の能に準拠した役柄が記載されている点から、錦心流と能との関連に注目し、能作品に取材した琵琶歌と典拠となった能作品との詞章比較を通して、能からの影響および琵琶歌化に際しての工夫を考察する。

先行流派のレパートリーとの比較では、錦心流については流派の定本として用いられる歌本『薩調四絃愛吟集』（以下、『愛吟集』）、先行レパートリーについては島津（2000、2001）に基づき明治期に刊行された琵琶歌本を底本とした。古曲で継承された琵琶歌は、詞章の異同が比較的多く、また明治新曲や錦心流新曲ではあまり新作されなかったジャンルが含まれており、『愛吟集』に多様な題材の琵琶歌を収載しようとした状況がうかがえた。明治新曲は、助詞等の細かい文法的な誤りの修正により文学的な質の向上が図られつつも、原詞章をほぼ保持した形で錦心流のレパートリーに取り込まれており、既存の琵琶歌は主に音楽面での工夫により先行流派との差異化を図ったことが推察された。

能作品に取材した錦心流レパートリーについては、『宝生流謡本』を底本として詞章を比較し、引用の実態について調査した。能典拠と明言されている錦心流のレパートリー（《接待》《舟弁慶》等）では、部分的に謡の詞章をほぼそのまま引用している一方で、登場人物のセリフにあたる謡の「詞（コトバ）」の箇所を、第三者の視点による地の文へ修正し、詞章全体の分量を削減していた。また、シテとワキの配役が能作品と琵琶歌とで入れ替わる演目も確認され、能のシテによる謡や舞といった演出を伴わない琵琶歌では、史実に基づく物語展開に主眼を置いて配役を選択したのではないかと考えられる。さらに、琵琶歌と題材が共通する能作品は、夢幻能よりも現在能に分類される演目が多い点や、歴史的出来事への取材を主とする琵琶歌の特徴として確認できた。

本発表では詞章比較による考察にとどまったため、今後は音楽内容（節付け）の分析を通して、錦心流における流派の確立の実態を明らかにしたい。

## レポーターによる報告

薦田治子

本発表は、薩摩琵琶錦心流への先行流派や他種目からの影響を、詞章研究を通して明らかにしようとするものであった。

初めに薩摩琵琶錦心流およびその創始者永田錦心を紹介し、錦心流のレパートリーを楽曲の成立時期により、古曲（江戸時代）、明治新曲（明治時代）、錦心流新曲（明治末以降）に分類したうえで、二つのテーマ、「先行流派」のレパートリーを撰取する際の詞章の改変と、「能作品」の琵琶歌化に際しての詞章の扱いに注目して調査している。

錦心流が「先行流派」から撰取したレパートリーは古曲と明治新曲である。錦心流の定本『薩調四絃愛吟集』（以下『愛吟集』）所載の古曲が扱うテーマは、崩、賀、釈教、述懐、恋など、明治新曲や錦心新曲では取り上げられることが少ないものであり、これらの曲の撰取はレパートリーの多様性を確保しようとしたためではないかと推測する。また、『愛吟集』所載の古曲と、明治時代に出版された琵琶歌本所載の古曲の詞章を比べると、詞章の改変は大きく、《敦盛》のように、改変しきれず『愛吟集』から削除された曲もあるという。いっぽう、明治新曲については、先行流派である正派の琵琶歌作品を取り入れたが、詞章の改変は少なく、文法的な誤りを訂正した程度だが、このことにより、文学性を高めたという。《月下の陣》には漢詩を挿入することで琵琶歌の要素を強めたともいう。

次に、「シテ」「ワキ」などの記載が『愛吟集』にあることと、流祖錦心が宝生流の謡を稽古していたことから、錦心流に影響をあたえた他種目の例として能を選び、謡本と琵琶歌の詞章を比較をする。琵琶歌化に際し、詞章の短縮やコトバを地の文に書き換えるなどの改変がおこなわれているという。能に基づく琵琶歌は流内の教習階梯の上位に置かれ、能の撰取には琵琶歌の高尚化の目的があったのではないかとという。また、琵琶歌では、「シテ」「ワキ」といった役柄が能のそれと変換されることがあり、夢幻能より現在能を琵琶歌の素材にする傾向があるといったことも指摘している。

フロアからは、詞章異同を調査した結果、能からの音楽的な影響についての何らかの見通しが得られたか、能撰取の目的は何だったのかという質問と、能の撰取については、琵琶歌の節付けも視野に入れた分析を行うといいのではないかとという指摘があった。

先行流派の作品や他種目作品からの引用といった基礎的な詞章研究の作業を丁寧に行っていることは高く評価される。今回の得られた手掛かりを出発点に、今後は、歴史的背景や、同時代の他種目における能の撰取の状況なども考慮に入れ、さらに考察を深めていかれることを期待したい。

## 研究発表

「ヴィッセンシャフトリッヒ」に考える  
——R. ヴァラシェクと音楽研究の論理——

小川将也

## 発表者による要旨

小川将也

ウィーンの音楽研究者 R. ヴァラシェク（1860-1917）による「自然民族」の音楽実践を扱った英語著作『原始音楽』（1893年、以下『英語版』と表記）とそのドイツ語版『音楽芸術のはじめ』（1903年、以下『ドイツ語版』と表記）は、しばしばウィーンにおける比較音楽学の最初期の試みとして紹介される。本発表は、平易な文体とは裏腹にきわめて難解な、『ドイツ語版』第IV章「われわれの音楽システムの基盤」を主たる分析対象に、ヴァラシェク自身が形容するところの「本質的変更」の実質ならびにその変更を可能にした思想的背景を再構成する試みである。

ヴァラシェクは、『英語版』にて仮説として提出した全音階の楽器由来説を、『ドイツ語版』ではアフリカとアジアに由来する二種類の音階グループを紹介し、さらに、和声、旋律、調性といった西洋芸術音楽の諸原理を簡素な管楽器が発する自然倍音（自然法則）ならびに人間に生得的な「潜在的な和声感」に還元する〈統合テーゼ〉を提出することで説明し根拠づけようとする。この音階グループの紹介と諸民族の音システムを単一原理の下に理解しようとする統合テーゼとは一読して矛盾するように思え、本発表では「本質的変更」に伴って生じたこの矛盾の背景とその解消の可能性を考察した。

最初期の著作『音楽芸術の美学』（1886年）から『ドイツ語版』に至るまでの期間に発表されたヴァラシェクの諸論考を渉猟するなかで浮かび上がってくるのは、彼の音階論を貫く鍵概念としての「自然」概念である。全音階の楽器由来説ならびに統合テーゼは、実は、『音楽芸術の美学』においてすでに準備されていた音楽美学の自然化を実践する主張であり、自然と人為との関係をめぐって従来の音楽美学の言説領域をラディカ

ルに再編成する試みだったのである。この事実は同時に、彼の音階論を〈セント、フォノグラフ、客観性〉の三位一体を理想とする比較音楽学の学説史のなかで読むのでは不十分であることを意味する。すなわち、諸民族の音楽実践の多様性を無視する彼のきわめて保守的な統合テーゼは、第一に音楽美学史の文脈に属す、ヘルムホルツの音楽理論への応答であるのに加え、彼の独断ではなく当時最新の民族学の知見を援用してもいた。また先の〈矛盾〉は、「人種」概念にうって「われわれ」の語が及ぶ「自然」な範囲からアジア人を除外する危険な論理操作によって回避されていると考えられる。さらに、フォノグラフに対するヴァラシエクの態度もまた、「自然」概念に注目することで比較音楽学者たちの見解とは「認識的徳」からして根本的に異なる言説として理解可能である。

総じて、ヴァラシエクのきわめて問題含みの音階論は、音楽における〈自然〉を境界づけ理論化しようと格闘するそれ自体ひとつの歴史的で緊張をはらんだ〈ヴィッセンシャフトリッヒ〉な態度の産物だったのである。

#### レポーターによる報告

鈴木聖子

本発表は、比較音楽学の「第一世代」とされる音楽研究者 R.ヴァラシエクの仕事を、同時代の著名な比較音楽学者（シュトゥンプ、ホルンボステルら）の仕事と比較分析し、「フォノグラフを中心にして築き上げられた比較音楽学像」を問い直すことで、新たに研究史上に位置づけようとするものである。前半では、ヴァラシエクの著作を段階的に分析しながら、「自然民族」にも「調性」「和声」が「胚」として存在するという主張や、特にヘルムホルツへの批判として和声法と対位法が「自然民族」にも見られるという主張が唱えられたことが述べられた。ヴァラシエクは、「自然民族」の音楽実践が「計測可能な」「自然法則」に支配されることで西洋の「芸術音楽」の主要な要素すべてを持つ、という〈「自然」の逆説〉（発表者の表現）を通して、西洋の音楽芸術の要素を「自然」の側に配置したという。後半では、ヴァラシエクのフォノグラフに対する思想もこの〈「自然」の逆説〉の思想に対応する形で構築されているという見解が述べられた。ヴァラシエクは、フォノグラフに録音された音楽を「自然」なものと認識する当時の比較音楽学者に対して否を唱える。フォノグラフに録音された音楽を研究に用いるためには、調査者（「文化民族」）が対象者（「自然民族」）の「習性、習俗」に通じているだけでなく、逆に対象者が調査者のことをよく知って「自然」の状態にある（＝緊張状態にはない）ように配置した上で、複数回に渡って録音をする必要があるという。ここに見られる、研究者に支配される「自然民族」の「自然」という「逆説」こそ、前半の〈「自然」の逆説〉に対応するものであるという。

発表後の質疑応答では、会場から、前半と後半で紹介されたヴァラシエクの「自然」の概念が一樣ではないこと、ヴァラシエクの理論が「東洋人」を疎外したことを発表者が問題とする意味、発表者がヴァラシエクに着目した理由すなわち研究目的などについて問う声が上がった。これらは「自然民族」に対する「われわれ」のポジションナリティを問う声でもあろう。現在、比較音楽学は制度上は民族音楽学と名を変えて存続しているが、一枚岩的なポストコロニアル批判ではその問い直しに限界があるのも明らかである。この視点からヴァラシエクにおける複数の視線を掘り起こす作業は重要である。ヴァラシエクの認識論が非西洋の音楽や西洋の非芸術音楽にもたらす新しい知見に期待したい。

#### 研究発表

「大人のピアノ」における書物を通じてピアノの演奏を学習するメカニズムについて  
——R. ヴァラシエクと音楽研究の論理——

上野正章

#### 発表者による要旨

上野正章

日本におけるピアノ受容は緩やかに進行していった。早くも明治・大正の頃から教員・芸術の文脈で導入された一方、子どものお稽古事として浸透するのは昭和後期を待たなければならず、大人の趣味としての普及するのは、やっと昭和期の末頃からであった。

大人はどのようにしてピアノを習ったのだろうか。大人の音楽経験は様々で、音楽能力も格差が大きく、好みも多様性に富む。学習目標も人によって異なる。奏法の伝授において常に中心的な役割を果たしてきたのは対面教授だが、個人の状況に応じてレッスンを用意することはそれほど容易なことではない。速やかな普及を振り返ると、他の要因を考える必要がある。

注目したいのが、大人のピアノの流行に平行して出版されたピアノ学習に関する書物、とりわけ独習書——言葉による十分な解説や付属資料を付け加え、利用者の独習を視野に入れて編集した教則本——である。

大人は子どもよりも読解力に勝る。独習書は考えられてきた以上に大人のピアノの学習に重要な役割を果たしたのではないだろうか。本発表はこれを踏まえて試みた独習書の調査の報告である。

1970 年頃からゼロ年代までの期間に出版された独習書を目録化し、内容を精査したのだが、調査から明らかになったのは、まず、大人のピアノの流行に平行した初心者向け独習書の増加であった。重刷を繰り返した独習書もあり、総発行部数は膨大な量に上る。書物を通じて日本中にピアノの学習環境が生み出されていたと考えられる。また、記述の検討を通じて判明したのが、コード奏法を応用した新たな練習法の提案である。従来コード奏法は、コードネームとリズムパターンに基づく自在な即興と理解され、もっぱら中・上級者が学ぶものとされてきた。他方、考案されたのは、コードネームに従って作成され、記譜されたたごく簡単な伴奏譜からピアノやキーボードの学習を始めるという試みで、初学者でも極めて早い段階から楽曲に取り組むことができる。

独習の実態などまだまだ不明な点が多いが、調査結果の分析から判断する限りにおいて、独習書は大人のピアノの流行に貢献した可能性が高いと考えられる。

### レポーターによる報告

陣内みゆき

上野氏の発表は、1970 年から 2000 年代に刊行された「ピアノ独習書」を網羅的に調査することによって、大人のピアノ学習の様態を読み取ろうとする内容であった。氏は「独習書」を、段階的かつ体系的に記される「教則本」の特徴に加えて、言葉による説明や十分な補足資料を備えた出版物と定義付け、初心者が独習することを想定した学習書の出版が増える過程を明らかにした。ピアノの教本についての研究は教育的側面からの実践や受容、身体論を論じる内容まで多岐に亘るが、本発表は個別の分析から離れ、対象を独習書に絞り全体を概観しようとする試みに力点が置かれた。

氏によれば、昭和末期以降、趣味や稽古事としてピアノを習う大人が増え、学習の目的が多様化したため、音楽教室での対面に加えて独習が重要視されたという背景がある。学習書は主にポピュラー音楽を扱い、基本的な奏法や楽典のほかに、コードや指の訓練法をも含む内容を基本とする。発表では、最初の学習書が発刊された際には経験者を想定していた内容が、1980 年代に入るとガイドブックの性格を強め、平成期には実践記録やレッスン内容の再現など新しい側面を持つ学習書が急激に増えていく様子を、個別の事例を挙げながら丁寧に論じた。当初は特定の著者が担っていた学習書の分野が約 30 年の間に多様化した過程を追いつつながら、こうした学習書の増加は、大人のピアノ学習の普及に効果があったという強い見通しを得たと述べた。

会場からの質問では、言葉の定義や研究方法についての質問があがった。学習書の内容から、特定の情報—例えば大人のピアノ学習のモチベーションの傾向は読み取れるかという質問には、学習書をどのように読んだかということは検証不可能であるが、内容は多岐に亘るため、むしろその多様性が大人の学習の特徴であるとの回答があった。また、これまで氏が取り組んできた明治期から戦後のピアノ受容と比較して、本発表対象期間の傾向について尋ねる内容には、映像や音源という媒体の出現に伴って、明治期・大正期と現代では「考え、分析し、再構成する」という学習プロセスに費やす比重が大きく変化したとの答えがあった。発表者からは同テーマについて今後も長期的に研究を進める意向があるとの発言があったため、今後も緻密な調査を続け、長いスパンの中でのピアノ学習の在り方の変遷を、歴史的に位置付けることが期待される。

### 研究発表

田中正平の 13 鍵式純正オルガネット  
——特設鍵の採用理由の明確化——

篠原盛慶

### 発表者による要旨

篠原盛慶

物理学者の田中正平（1862-1945）が開発した純正オルガネットは、21 鍵を有する純正調オルガン（第 1 号器は 1932 年）の小型モデルであり、西洋の機能和声に基づく楽曲の演奏を主な目的とした楽器である。

21 鍵の純正調オルガンが初等教育用としては不便であったため、田中は 1937 年、12 鍵の通常の鍵盤を備えた純正オルガネットを創案した。第 1 号器は通常の鍵盤を備えていたが、田中の主著『日本和聲の基礎』（1940）で説明される型には、F# 鍵の前方に小白鍵（特設鍵）が追加されている。この特設鍵の存在は、純正オルガネットの当初の製作意図とは異なると推察される。

田中の主著には、13 鍵式純正オルガネットに関して、特設鍵によって彼が提唱する日本和声の和音進行で

生じる不協和な5度を回避できることが追記されている。本発表では、この追記を根拠に、13鍵式に特設鍵が採用された理由は、その5度を回避することにあったという仮説を構築し、論証を進めた。

考察の結果、いくつかの点が確認された。まず、特設鍵から発せられる音は、七の和音や九の和音の第7音としての役割のみを有することが判明した。しかし、第1号器と比べると、和音や音階の運指は複雑となり、加えて純正オルガネットが初等教育用であることを考慮すると、特設鍵の必要性は限定的であると考えられる。

一方、日本音楽研究用楽器の観点から考察すると、異なる側面が見出された。田中提唱の日本和声における和声進行では、特定の状況で不協和な5度(32:21)が生じる場合がある。この不協和な5度を回避するため、田中は純正5度(3:2)を形成する音を選択しており、特設鍵から発せられる音は、この純正5度を形成する音であることが確認された。また、田中が考案した音階を、通常の鍵盤を備えた第1号器の鍵盤上における配列と同じ配列を保ったまま演奏できる点も確認された。このように、田中の日本和声の観点からは、特設鍵は、純正5度を演奏可能にする明確な利点をもたらすことが示唆される。

これらの考察と確認事項に基づいて、13鍵式に特設鍵が採用された理由は、田中の日本和声の和音進行で生じる不協和な5度を回避することにあったと結論づけられる。本発表は、13鍵式が日本和声を基に改変された楽器であるという新たな知見を示すとともに、これまで具体的内容が不明確であった田中の日本音楽研究における「理論の応用と実践」という一側面を明確にすることができた。

#### レポーターによる報告

筒井はる香

物理学者である田中正平が製作した「純正調オルガネット」には、「特設鍵」と呼ばれる小白鍵が採用されている。その理由を、田中の著作などを手がかりとして明らかにする篠原氏の研究発表を聴く機会を得た。一般的に純正調オルガンは西洋楽器であるという固定概念があるが、田中の純正調オルガネットは、彼が提唱した日本和声理論と関連が深い。特設鍵の役割も、彼の理論を踏まえることで初めて明確になることが一次資料の読み込みと緻密な検証によって明らかにされた。発表者によれば、特設鍵は、日本和声の和音進行で生じる不協和な5度を回避するために取り付けられたものであった。

発表後の質疑応答では、以下の点について議論された。「12鍵式と13鍵式が同一の運指であることについて、どの範囲までを同一というのか?」「なぜ日本の音楽理論と合わせて考えるときにはひざ板の使用・不使用が問題にならないのか?」「田中自身によって日本和声の不協和な5度を回避するためと追記されたのはどの段階なのか?」

これらの質問はいずれも発表内容の理解を一層深めるものであった。特に最後の質問は、今回の発表において核心に触れる内容であったと考える。なぜなら、上述の「追記」が田中の著作に初めから明記されていたにもかかわらず、なぜ先行研究においてその点が看過されてきたのかを問うことにつながるからである。これに対し発表者は、「純正オルガネットが日本和声の理論に基づいた楽器であるという記述が十分になされていなかったこと、田中の日本和声自体が難解であるため、先行研究において関連付けがうまくできていなかったのではないか」という見解を示した。

篠原氏の発表と一連の質疑応答を傍聴し、筆者が感じたことは、問題提起とその結論は明快であるにもかかわらず、そこに至るプロセスを理解することが難解であったことである。田中独自の理論用語が頻出したことも理由として挙げられるだろうが(そのために、資料に用語集があれば分かりやすかったらう)、議論の進め方にも要因の一端があったのではないだろうか。具体的には、通常は冒頭で言及されることの多い先行研究が発表の終盤で示された点、「追記」を含む田中の言説の典拠が発表中に明示されなかった点、運指の具体例が十分に示されなかった点が挙げられる。極めて詳細な議論に入る前の理論的枠組みがより分かりやすければ、筆者のような門外漢であってもより理解が深まり、その後の議論も一層活発になったであろう。とはいえ、今回の研究発表は、現存する楽器単体の調査だけでは明らかにならない問題が、理論書などに記された情報と合わせて複合的に考察することではじめて解明されることを示し、楽器研究に大きな示唆を与えてくれるものであった。

□ 編集後記 □

『西日本支部通信』第27号(電子版)をお届けいたします。今号には、二回の定例研究会(第63回と第64回)の発表要旨と報告が収録されています。要旨や報告をお寄せいただいた発表者とレポーターの皆様に、厚く御礼を申し上げます。

さて、私はこの4月より西日本支部委員(支部通信担当)を拝命し、今号より『西日本支部通信』を担当させていただくことになりました。しばらくぶりの支部委員の任に戸惑っておりますが、編集幹事には前年度より引き続き西澤忠志さんをお願いすることができたので、心強く思っております。

ところで、現支部委員のあいだで、長らく運用されてきた西日本支部メーリングリスト「msj-k」について議論になりました。これはインターネット黎明期の1990年代に、「関西支部」時代に有志によって開設されたものがルーツで、2000年代まで支部会員同士の情報共有や議論をおこなうメディアとして活発に利用されていました。しかしながら、もはやインターネットはあたりまえ、今ではそれを前提としたさまざまなSNSが展開している昨今においては、その存在意義を失いつつあるようです。2000年頃より支部のIT関係に関わってきた私としては、非常に感慨深いものがありますが、その終焉をきちんと見届けたいと思います。

今後とも日本音楽学会西日本支部の活動に、ご期待・ご協力いただけましたら幸いです。最後に、各種学会関連情報のアクセス方法についてお知らせします。(I)

**FILE** 西日本支部通信

年に2回、PDFで発行され、西日本支部のホームページより随時閲覧可能です。個々のご事情で、紙面版の送付をご希望の会員は支部事務局にご相談ください。

**MAIL** 日本音楽学会Information Mail

学会本部より毎月1回、各支部の例会、支部横断企画、研究発表奨励金など、多様な情報が送信されています。登録ご希望の方は、日本音楽学会本部事務局 office(at)musicology-japan.org 宛に、件名を「インフォメーションメール登録希望」としたメールを送って下さい。

日本音楽学会西日本支部メーリングリスト(msj-k)

こちらのサービスは2026年3月に停止する方向で検討しております。1990年代の関西支部時代にルーツをもつ支部会員メディアでしたが、ここ数年はほぼ利用がない状態が続いているので、その役割を終えつつあると考えております。これに関するお問い合わせは、今田健太郎委員(imada\_ke@ta.rdy.jp)までお寄せください。

**WEBSITE** 日本音楽学会 <http://www.musicology-japan.org/>

日本音楽学会西日本支部 <https://msj-west.com/>

当通信へのご意見・ご質問、ならびに原稿掲載のご希望がございましたら、編集担当委員までご連絡(連絡先は末尾に記載)ください。あわせて、本部・支部の事務局等に宛てて原稿をたまわる折、PCの記号の使い方について、以下ご参考くださいますと幸いです。

- ・ 以下の記号は、ウェブサイト上で適切に表示されない場合があります。  
文字内の補助記号(ウムラウトやアクセントなど) / 半角カタカナ  
文字装飾(丸付き文字や全角データとしてのローマ数字)
- ・ 文中に傍点や書式設定(ゴシック・イタリックなど)の設定をなさりたい場合は、メール本文でなく、Microsoft Wordのファイルに記入して、メールに添付してください。

日本音楽学会『西日本支部通信』第27号

発行者：日本音楽学会西日本支部

事務局：小石かつら(西日本支部長)

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学文学部美学研究室気付

E-Mail: msjwestatkg@gmail.com TEL: 0798 54-6212

編集者：今田健太郎(2025年度編集委員)

〒583-8501 大阪府羽曳野市学園前3-2-1 四天王寺大学文学部

E-Mail: imada\_ke@ta.rdy.jp